



「**対**州馬」は数少ない日本在来馬の一種で、対馬固有の馬。体高は約百三十センチと小型でおとなしく、

温厚な性格が特徴である。また力が強く、持久力に優れていることから、対馬では長い間、農耕馬として人々に愛されてきた。

現在、対州馬は全国に約五十頭しかおらず、そのうちの三頭が佐世保市にある「九十九島動植物園森きらら」で暮らしている。飼育員の村上浩一さんが連れて来てくれたのは「豊姫」と名付けられた、今年二十四歳のおばあちゃん馬。とてもおとなしく、澄んだ目が美しい。小柄で可愛らしく、子どもでも怖がることなく、触れ合うことができるのが、対州馬の魅力の一つ。

森きららでは、対州馬がかつて農耕馬として活躍していたことを知ってほしいと、当時の姿さながらに飼育員と

ともに、園内を散歩する。豊姫は村上さんが一歩前に進むと、同じように一歩足を踏み出す。後ろに下がると、また同じように後ろ足を引く。その様子は「おりこうさん」以外の何者でもない。来園者と触れ合う機会が多いため、こうした訓練は欠かせない。しかしやはり大切なのは、コミュニケーション。村上さんは「対州馬は人間と共に生きてきました。ですから人との関わりはとても重要で、信頼関係を築くことが大切です」と話す。朝夕のブラッシングの時はもちろん、村上さんは常に馬に話しかける。そうすることで、お互いにリラックスする効果もあるという。また、安心感を与えることも大事なポイント。「馬は雷や強い風、大きな音を怖がります。そうした時に『大丈夫だよ』と声を掛け、安心させる。こうした日々の積み重ねが信頼関係につながっています」。

森きららでは土日・祝日に、子どもたちを対象にした乗馬体験を行っている。「子どもたちが『乗せてくれて、ありがとう』と馬に言っているのを見ると、本当に嬉しいですね。その気持ちは、彼らにもきっと伝わっていると思います。動物たちがいかに幸せに生きられるかを考えるのも、私の大切な仕事です」。村上さんは「褒める時はこうするんですよ」と言って、豊姫の首を優しくたたいた。

園内を散歩する対州馬「豊姫」と飼育員の村上さん。来園者に声を掛けながらの散歩は、とても和やかな時間。

# 対州馬

人と共に生きてきた  
力強く優しい馬。

